

『光輪』

より抜粋

昭和二十五年四月四日

東西本願寺布教大会

体験を語る

(法龍は死後の一大事よりは今の一息が一大事であったのだ)

(讃題)

大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば至徳の風静に衆禍の波転ず即ち無明の

闇を破し、速やかに無量光明土に至りて、大般涅槃を証し、普賢の徳に遵うなり(行巻)

この御讃題の意味は人世は果てしのない生死の苦海であります、弥陀の名号を聞信し、

撰取不捨の利益を蒙り、本願や行者・行者や本願の身となれば、この人世のままが光明の広海

と変り、無明の闇が晴れさえすれば、現益として至徳具足の益、転悪成善の益を獲、当益

としては報土往生を得て弥陀同体の証を得る。この現当の両益を蒙れば普賢の徳に遵

うなりと言う還相廻向の利益を獲ると言う意味であります。

皆みな様さんは疑うたいが晴はれて満まん足ぞくが出来できましたか。

凡ぼん夫ぶが晴はれられるか、凡ぼん夫ぶにこれで満まん足ぞくと言い

うことが有あらるるかとおと仰おほせらるるかも知しれませんが、晴はらす力ちからが光こう明みょう無む量りょうにあり、満まん足ぞくさす力ちからが寿じゅ命めい無む量りょうにあるのであります。

鸞どんらん師さまは「論ろん註ちゅう」に名み号ごうを如に実じつに聞もん信しんすれば「衆しゅ生じょう

一切いっさいの無む明みょうの闇あんを破はし、衆しゅ生じょう一切いっさいの志しがん願まんを満まん足ぞくせしめたまふ」と仰おほせられ、祖ご師いさんはこの意こころ味を和わ讃さんに

無む碍げ光こう如に来らいの名み号ごうと かの光こう明みょう智ち相そうとは

無む明みょう長ちやう夜やの闇あんを破はし 衆しゅ生じょうの志しがん願まんをみてたまふ

と仰おほせられてありますが、同どう行ぎやう方がたは晴はれて満まん足ぞくが出来できましたか、出来できないのは観かん念ねんの遊ゆう戯ぎを
しているだけであつて、実じつ地ちの体たい験けんが無ないからであります。 他た力りき不ふ思し議ぎの名み号ごうを三さん十じゅう年ねん間き

かされても、五ご十じゅう年ねん間きかされても、晴はれたも判わからず暮くれたも判わからないのは何どこ処こに欠け点ってんがあるか

御承知ですか。今西本願寺切つての問題の布教師大沼法龍が生命を懸けて真仮の水際、信前
信後の角目を判然り鮮かに説かして戴きますから全国から参集された選り抜きの同行方は、
腹を据えてお聞きなさいよ。

貴方は三毒の煩惱は往生の邪魔にならない。この機に用事はない。助かっている事を聞
けと平気で澄ましておいでになるが、その煩惱の中に第十八願から洩れた代物がいくつも隠
れている事を御承知ないのでしよう。挙げて見せましようか。

第一に五逆、この大衆の中に親を殺さない人が一人でもおりますか。手を掛けてこそ殺さな
くても、心の中で毎日毎時殺しどおしに殺しているではありませんか。

第二に謗法、同行は高座の下から、下手じゃ、上手じゃ、長いじゃ、短いじゃと小言言つて
いるのは謗法であり、僧侶は高座の上から、あれは異安心これは間違いと自分の程度の低い

事は判らないで批判しているのが、謗法の親玉なのだ。

第三に闡提、これは無信と訳す。地獄と聞いても驚かず、極楽と聞いても慶ばず、まだ死なないと平気でいる心、宗教を受けつけない心が闡提なのだ。

第四に邪見、自分は信前の入口にいる事も知らずに、信後の鮮やかな境地、「善も欲からず悪も恐れなし」など聞かされた時、凡夫にそんな判然した事が有らるかと攻撃しているのが邪見であって、これは法の不思議さが判らないのだ。

第五に憍慢、私は素直に聞かして戴いて一度も疑うた事はないと自惚れているが、三千世界を採らたって素直な人間がおるものかい。法座に出た時だけ猫を冠っているのだから、素直な者と自惚れているのは機の深信が抜けているのだ。

第六は弊、弊とは修繕がきかないのだ。信前信後の水際を分けて聞かしても「あんな難しい

事は判らないから、昔のなりの死にさえすればお助けで負けて置いて貰おうや」と包む稽古をして、いる人が弊で修繕がきかないのだ。

第七が懈怠、今日聞けなければ明日、この度の御縁で解決がつかなければ、次の御縁と長綱を張るのが懈怠ではないか。

同行よ!! 第十八願から 唯除五逆誹謗正法とこの二機は除かれてあるぞ。すると直

に「謗法闡提廻心皆往」と 善導様は仰せられて有ると言うかも知れないが、言われてあるよ、有ればよいではないか、それは御教化の御言葉よ。御言葉が書かれてあるのは書か

れた方のお心よ。廻心したか。逆謗のいる事さえも知らずに、素直に聞いていると自惚

れている人間に廻心が有るか。廻心のない人間に懺悔が有るか。懺悔のない人間に機

深信が有るか。機の深信のない人間に法の深信が有らるか。「涅槃經」から 五逆・

謗法・闡提は難化の三機、難治の三病は教化が出来ない、療治が出来ないと捨ててあるの

だ。「正信偈」から「邪見憍慢の悪衆生は信樂受持すること甚だ以て難し、難中の難こ

れに過ぎたるはなし」と捨ててあるのだ。

「大經」下巻の東方の偈に「憍慢と弊と懈怠とはこの法を信ずること難し」と三機は除かれてあるのだ。一つ有っても助からないのに、七つ道具を具備して置きながら、この機に用事はない、死にさえすれば華降る浄土とは何を寝呆けているのだ。

何を生意気な事を言う 南無は機の方、阿弥陀仏は法の方、機法一体に成就してあるの

に、今さらこの機を見る必要が有るか、と言わるるかも知れないが、成就して有るのなら遠慮なく御覧なさいよ。いくら法体には成就してあっても、機受の信相が抜けておるなら

自分のものにはならないではないか。いくら法体成就の機法一体は十劫の昔に完成されて

あっても、今現在に信念冥合の機法一体の領受が出来なかったなら、觀念の遊戲に過ぎな

いではないか。いくら十劫の昔に正覺を成就されても、信樂開發しなかったら自分とは

無関係ではないか。

親が大丈夫でも、子が大丈夫に成れなかったら

「行者正受金剛

心」とか、「この心深信せることなほし金剛の若し」と仰せられた御言葉が嘘に成るではな

いか。それでも本派では機を突いて教える者は異安心だと批難しているが、自分の機

さえも突いて教え切らない者は実地の体験の無い無安心の親玉だ。機を突く奴は間違

だと攻撃しているが、逆謗の屍が自分であることさえも気が付かず、素直な者と自惚れてい

るのは氣狂いだぞ。

同行よ!! 真宗の大部分の布教師が、自分は第十八願を体得したと得意がって布教してい

るが、法龍の眼から見れば第二十願の入口にいて、第十八願の真似ばかりしている幼稚な

危険な布教を平気でやっているのだ。あれで真宗が発展すると思っていいたら大間違

だ。いくら声や節や抑揚で錦を着せていても、いくら泣かしても笑わしても美辞麗句を

並べても、身振りや学階で威して見ても、つづまるところは「わが機に用事は無いぞ、素直

に名号みようごうに向むいておれ、死しにさえすれば弥陀みだ同体どうたい」に持もって行ゆくより他ほかに道みちがないのだ。何なん

と情なさけない布教ふきようかい。欠点けってんを挙あげて見みせましょうか。

第一だいいちの欠点けってんは「わが機きに用事ようじはない。この機きを見みていては千年経せんねんたっても夜よは明あけない」

と言いっているが、わが真実しんじつの機きに用事ようじが無なければこの忙いそがしい世よの中なかに説教聞せつきようききなさん

な。この真実しんじつの機きを生いかそうための五兆ごちようの願行がんぎようではなかつたか。この自力計度じりきけたくの計はからい

の機きに留とどまっていては千年経せんねんたっても夜よは明あけないのだ。この実機じつきが名号法みようごうほうに満足まんぞくささるる

まで なぜすすまないのだ。本願ほんがんや行者ぎようじゃ・行者ぎようじゃや本願ほんがんが第十八願だいじゅうはちがんの境地きようちではないか。法ほう

を見てよし機きを見てよしが仏凡ぶつぼん一体いつたい、機法きほう一体いつたいの妙味みょうみではないか。それを見みては手間てまが掛か

ると包つつむ稽古けいこをしているのは自力じりきの臭くさみが残のこっているからではないか。だから第一だいいちの欠点けってん

と言いっているのだ。

だいに けってん だれ かれ

すなお き

い

すなお き

い

第二の欠点は誰も彼もが、「素直に聞けく」と言っているが、素直に聞けと言わなく

ても、お説教を聞きに来て^きいる者^{もの}に喧嘩^{けんか}しようと思^{おも}つて来^きている者^{もの}は一人^{ひとり}もないのだ。

皆^{みな}素直^{すなお}に聞^きいているのだ、感情^{かんじょう}の猿^{さる}だけは。

素直^{すなお}に聞^きき得^うる人間^{にんげん}なら善人^{ぜんにん}だ。善人^{ぜんにん}なら

悪人^{あくにん}正機^{しょうき}的^{まと}が外^{はず}れているから

第十八願^{だいじゅうはちがん}の対機^{たいき}にはならないのだ。

三世^{さんぜ}の諸仏^{しよぶつ}が呆^{あき}れ

て逃^にげている機態^{きざま}を抱^{かか}えておりながら、素直^{すなお}に聞^きけとはチャンチャラ可笑^{おか}しいではない

か。なぜ素直^{すなお}に機態^{きざま}を見^みよと教^{おし}えないのだ。

素直^{すなお}な人間^{にんげん}と自惚^{うぬぼ}れているから第二^{だいに}の欠点^{けってん}

だ。

第三^{だいさん}の欠点^{けってん}は「名号^{みょうごう}に眼^めをつけよ」と教^{おし}えているのが欠点^{けってん}なのだ。

名号^{みょうごう}に眼^めをつけるの

が欠点^{けってん}か。いかにも欠点^{けってん}だ。それを第二^{だいに}十願^{じゅうがん}の機類^{きるい}と言^いっているのだ。

「名号^{みょうごう}には万善^{まんぜん}

万行^{まんぎょう}恒沙^{ごうしゃ}の功德^{くどく}が籠^{こも}っているから、名号^{みょうごう}に眼^めをつけよ」とは棚^{たな}の上^{うえ}にお前^{まえ}の為^{ため}の牡丹餅^{ぼたんもち}がで

きているから喜べよと、眼を付けただけで何が有難いのだ。何時食べさしてくれるの

だ。死にさえすればー。こんな馬鹿らしいことが有らるるか。此の世ではどうも成れ

ないのだ、死にさえすればと 向うに眼をつけて喜べ、と。これで生きた宗教と言えるか。

だから第三の欠点と言っているのだ。

第四の欠点は死にさえすれば弥陀同体、結果を言えばそうなのだ。しかし如何した人が

死にさえすれば弥陀同体なのだ。それは信樂開発さされた人の事であろう。それに信前

信後の角目も教えず (説教師) 「鶴の脚の長さを短こうせよと言うにも非ず、亀の脚の

短さを長うせよと言うにも非ず 胡椒の辛いは辛い儘、砂糖の甘いは甘い儘 悪い心を直せ

でないぞ、曲った根性を正せでないぞ。やりたい放題やりつらせ。飲みたい放題飲み

歩け。あとを受持つ親じゃぞよ」と言うような撫付け説教ばかりして、現在を抜きにして

死後を夢見て、平生業成がお留守に成っているから第四の欠点と言っているのだ。

これは私が勝手に言っているのではない、お聖教の定規に当てて見せましょうか。 祖師

聖人は「化土巻」に第二十願の信相を顕わして「信罪福の心を以て本願力を願求す、教

は頓にして根は漸機なり、行は專にして心は雑はる」、「信罪福の心」とは罪は恐ろしい

から出て来るなよ、福は有難いから出て来いよと言う気持ちで、本願力を願求するとは

名号を仰いでいるのだ。名号を向うに眺めているのだから名号は他力不思議で頓極頓速

に五十二段を超証す妙法であるけれども、受ける機態が愚図愚図している漸機だから、

何年経っても解決の境地まで進み切らないのだ。「行は專にして」とは諸善万行を離れて

名号一行を専修しているけれども、五專各修の程度だから心は雑修の境地を離れ切らな

いのだ。だから「信罪福の心を以て」とは「信罪」は、罪は恐ろしいと信ずるので、わが

機を見れば手間が掛ると恐れ、この機に用事がないと逃げるので、臭い物に蓋をする程度

だから自力の機執は除かれていないのだ。法を見てよし機を見てよしの第十八願の境地ま

で進んではいないのだ。

「信福」とは有難い心に眼をつけているので、

「素直に聞け素直

に聞け」と言っているのは善人を粧うているので悪人正機の的が外れているのだ。

己の

実機を抜きにして、名号の尊さに眼をつけて有難がっているので、教は頓であつても根は

漸機なのだ。だから、感謝の心が湧き上がり喜ぶ時は往生は一定の思いをなし、実機

の牛が角を出す時は往生は不定の思いをなす、若存若亡の境地を離れ切らないから、「死

にさえすれば弥陀団体」と現生不退を抜きにして死後の往生を夢見ているのだ。だからこ

の四つの欠点が祖師の「化土巻」の第二十願の境地に符合しているのではないか。だから

第十八願の説教に成っていない。危険極まる第二十願の自惚同行を増長さすに止まる

布教と言っているのだ。

いわゆる他力の中の自力の境地で「口伝鈔」のいわゆる善慧房の味方の体失往生身

命終を宣説するのであつて、平生業成に成っていないのだ。鮮やかな信樂開発の境地に

立っていないから、「死しんだら往生おうじょう、死しんだら華降はなふる浄土じょうど」と死後しごの往生おうじょうを夢見ゆめみており、この世よの解決かいけつがないから「何時いつとはなし」と言ういより他ほかに教おしえる方法ほうほうがないのだ。どうも

こんどき

りき　すがた

ちようじゆくこうみよう

そだ

こうむ

はつきりしないから、「今度聞いたら　く」と　力む姿が、調熟の光明のお育てを蒙り、

果遂かすいの誓ちかいの軌道きどうに乗のって第十八願だいじゅうはちがんに向むかって前進ぜんしんしているのだ。他力たうりきを向むこうに眺め、機きを包つつ

んで無我むがを粧よそおうているけれども、信前しんぜん信後しんごの水際みづぎわも立たたなければ、真仮しんけの分際ぶんざいもはつきり

は

まえ

は

あと

かどめ

わか

すなお

なみかぜ

た

せず、晴れない前と晴れた後との角目も判るはずがなく、ただ「素直に　く」と波風の立

たないようにお化粧けしようして、まるで腫物はれものに触さわるような信仰しんこうであり、ちようど去勢きよせいされ、ふ抜ぬけ

の形かたちの成なったのを無我むがの同行どうぎようのようこころえに心得こころえているが何なんと情けなさない退嬰たいえいてき的な信仰しんこうだろう!!

戴いた信が誠なら、み親の念力が届いたら、不思議の仏智が貰えたら、任せたら、

苦が抜けたなら、死んだらと、「なら」とか、「たら」とか、「だら」とか言うのは希望

であり、期待であり、希願であり、希念であつて、共に未来の事であつて、現在の事ではな

く、仮定であつて現実でないのだから、慶べるはずがないではないか。「百万円貰ったら」

が嬉しいか。

面白い例を挙げて見せようか。

或処に仲のよい夫婦がいて、家内が「鯛は塩焼が一番よ

い」、主人が「刺身が一番おいしいのだ」、「いや塩焼」、「いや刺身」と二人が争うて

いる時、隣の老人が通り掛つて、「何を争うているのだ」。「お爺さん聞いてお呉れよ、鯛

は塩焼が一番よいね、ほうれん草のおひたしに銀飯なら、いくらでも食べられるね」、「う

んそれは上等」、「お爺さんよ、一杯飲める癖に何を言っているのかい、刺身にわさびで

甘露醤油で、鼻をつんと突いた時、一級酒をきゅつとやって見なさい、胸のぐうぐう焼けて

行く時は何とも言えないよ」 爺さん口なめずりをしながら、「それは日本一」、「爺さん

どちらがよいかね」、「どちらもよい」 「それでは旗は上がらないではないか」、「それな

ら半ぺらは塩焼にせよ、半ぺらは刺身にせよ、中の骨は吸物にぜよ」、「それなら二人が喧嘩

をせんでもよいね」、「よい事を教えてやったから半分呉れよ」、「上げるだんではない

よ」、「それなら今出せ、料理してやろう」 「今はないよ」、「何時の事かい」、「貰うた

ら!!」

「貰うたら」で同行喜べるか!! 鏡に近寄れば姿が見える。 法に接近すれば機の醜さが

見えるのだ。 或る人達は機を突く者は異安心のように言っているが、無い物を有ると言え

ば間違いでもあろう。 有る物を有ると知れ、今現に逆謗闡提の機が動いているではない

か。 それが五兆の願行の的ではないか。 その機が開発さされなくて誰が助かるのだ。

三世の諸仏が呆れて逃げた実機の牛を、これに用事はないと包んで置いて 名号を高嶺の月

と仰おほぎ、 往生おうじようを死後しごの華はなと眺ながめて観念かんねんの猿さるを踊おどらして、この身みこの儘ままこの機きのなりで、
三惡道さんまくどうに走はしり込こもうとしているのが正當せいとうの安心あんじんか。

お経きようやお聖教しようぎように説とかれた難化なんけの三機さんき、難治なんちの三病さんびようの実機じつきを照てらし出だされて、 身命しんめいを賭として
求道きゆうどうし、難中なんちゆうの難なんを突破とつぱさされて、法ほうを見てよし機きを見てよし、握にぎる世話せわもいらないが離はなす
世話せわもいらない、 あら心得易こころえやすの安心あんじんに大満足だいまんぞくさされた境地きやうちが有あると教おしえるのが異安心いあんじんか。

法龍ほうりゆうは死後しごの一大事いちだいじよりは今いまの一息ひといきが一大事いちだいじであつたのだ。 今晴いまはれて満まん足ぞくの出来できない者
が死後しごの五十二段ごじゅうにだんが望のぞめるか。 手前てまえの川かわの渡わたれない者ものが死しんだ先さきが渡わたれるか。 死しにさえす

れば五十二段ごじゅうにだんとは嘘うそではないが、本當ほんとうではないぞ。 何故なぜ嘘うそでないか、死しななければ

五十二段ごじゅうにだんは超証ちようしやう出来できないのだから嘘うそではないのだ。 何故なぜ本當ほんとうではないのか、信樂開しんぎやうかい発はつさ

された者ものが五十二段ごじゅうにだんではないか。 どうも成なれない者ものが死しにさえすれば五十二段ごじゅうにだんとは、原因げんいん

を抜ぬきにして結果けっかを夢見ゆめみているから本當ほんとうでないと言いっているのだ。 こんな聞きき方かたをしてい

るのを寝呆ねとぼけていると言っているのだ。 こんな受取り方うけと かたをしているのを氣狂きちがいいと言っているのだ。

同行どうぎようよ、腹はらを据すえて聞きけよ。

弥陀みだの名号みようごうは光明無量こうみようむりようと寿命無量じゆみようむりよう。

光明無量こうみようむりようの智慧ちえ

が第十八願だいじゅうはちがんに作用はたらけば、唯除五逆ゆいじよごぎやくひぼうしいうぼう誹謗正法はいぼうしほうと 真実しんじつの機きが照てらし出ださるるのだ。

寿命じゆみよう

無量むりようの慈悲じひが第十八願だいじゅうはちがんに作用はたらけば、

若不生者不取正覚にやくふしうじやふつしゆしうかく しんじつ ほうと真実しんじつの法ほうが腕前うでまえを顕あらわすのだ。

実機じつきが照てらし出ださるるから信機しんきとなり、

懺悔さんげとなり俗諦ぞくたいの行儀ぎようぎとなるのだ。

この機きが攝取せつしゆせ

るるから、信法しんぽうとなり、歡喜かんぎとなり、真諦門しんたいもんとなるのだ。

調熟ちようじゆくの光明こうみようのお育てそだを蒙こうむり

素直すなおに聞きいていると言いう自惚うぬぼれが照てらし出だされて自分じぶんが極惡ごくあく

最下さいげの機きであつたことに驚おどろき、

極善最上の法ごくぜんさいじよう ほうに攝取せつしゆされた姿すがたが 至心信樂ししんしんぎようおのれわす 己忘れた境地きようち

であり、これを即得往生住不退転そくとくおうじようじゅうふたいてんとも平生業成へいぜいごうじようとも言い、これを信樂開発しんぎようかいほつとも心得開明しんとくかいみようと

も現生不退げんしいうふたいとも

「信受本願前念命終しんじゆほんがんぜんねんみようじゆう、即得往生後念即生そくとくおうじようごねんそくしいう」とも名づけ、 「御伝鈔ごでんしやう」に

は「たちどころに他力撰生の旨趣を受得し」、「御文章」には「三世の業障一時につみき

えて」と説かれ、「この一念をもつて娑婆のおわり臨終と思え」とか、「これを知らざ

るをもつて他門としこれを知れるをもつて真宗のしるしとする」とか仰せられ、祖師の

御己証の不体失往生、心命終となるのだ。この唯信独達の法門こそ浄土真宗の真宗たる

真価を発揮するのであつて、この境地に生かされた時、信前信後の水際も立ち、真仮の分際

も鮮やかに体得出来るのだ。

私も始めから機を突く布教ではなかった。大学を卒業して研究科に入学さして戴き、明年

卒業と言う時まで御聖教に眼を晒し、御説教を聞かして戴く時は有難涙に咽んだものであり

ます。暑中休暇で岩国に帰った時、上岡みよと言う女同行に突かれ、京都の嵐山で論文を書

いている最中に布哇の母より、

「明年三月は卒業ですが、学校の卒業は出来ても信仰の卒業が出来なかったなら、同行の心

を満足まんぞくさせることは出来できませんよ。

若し自分じぶんに開発かいぱつが無なくて説教せつきやうすれば、追剥おいはぎよりもまだ悪わる

いですよ。

本ほん当とうに開かい発ぱつしましたか。実じつ地ちに苦くが抜ぬけましたか。大満足だいまんぞくが出来できなければ、

無漏田開教師むろたかいきやうしが帰国きこくされて京都きやうとにおらるるから、訪たずねて、お聞きき下ください」との

手紙てがみを受取うけとってから腹底はらぞこに動うごかぬ心の蟠こころ わだかまっている事ことに驚おどろき、種々教しゆじゆえを蒙こうむり、道理理屈どうりりくつは

判わかつても、判わからぬ心こころが判然はつきり判わかり、真剣しんけんに成なればなるほど、反はん対たいの心こころが照てらし出だされたの

だ。これみちびを導ちしきく知識ちしきはおらぬか、これかいぱつを開かい発ぱつさす大徳だいとくはおらぬかと、いくたび総会そうがいしよ所あゆに歩

みを運はこんでも、「本願力ほんがんりきの不思議ふしぎさを素直すなおに聞きけ。戴いたいた信しんが誠まことなら死しにさえすれば華降はなふ

る浄土じやうど」より他ほかには教おしえ切きらないのだ。知識ちしきにはこんな心こころは無ないのか。同どう行ぎやうにはこん

な思おもいはないのか。有あるのに氣きが付つかないとすれば大おお事ごとだ。この心こころを誤魔化ごまかして死し後ごを

夢見ゆめみているのなら大たい変へんだ。

こんな底そこ抜ぬけの悪性あくしやうが隠かくれているのに 仏智ぶつちの不思議ふしぎがこれに届とどかなかつたなら救すくわれな

いではないか。このきよろつとした心は何時救われるのだ。卒業なんどは五年七年遅れたつて、この迷いの夢が覚めなかったら、無量永劫の問題ではないか。法のお手元は十劫の昔に正覚を取っておられても、今の苦悩を今晴らして戴かねば、私の解決にならないではないか。もしこの解決がついたなら、日本国中の僧侶から「機を突く奴は異安心だ」と総攻撃を受けようとも、世界中の人類から「機を語る者は間違い者だ」と批難されようとも、逆謗闡提の劣機がいるのが証拠ではないか。これが開発さされなくて仏智の不思議と言えるか。この底抜けの悪性が信楽開発さされなくて生きた大法と言えるものかい。石に嚙り付いても、たとい悶死しようとも、突破せずにおれるかい。

道綽禪師は「後から剣を抜いて追掛けているぞ、とは無常觀を教え、前を見れば渦巻く怒濤、着物を脱がずに飛込めば巻付いて溺れるとは、罪惡觀、この無常觀と罪惡觀に攻められた時でなければ信仰は徹底しない」と教えられた。

善導大師は「群賊惡獸に迫り立てられ忽ちに見る大河ありとは、自分の惡性に氣が付き、右を見れば渦巻く怒濤の青鬼、左を見れば燃え立つ焰の赤鬼、それが法龍の今の心ではないか。やめるにもやめられず、進むにも進まれず、頭の方は急いでも腹の底はまだ死なないと平氣でいる。この境地こそ三定死」と教えられたのだ、よし切抜けずにはいられないぞ。

祖師聖人も二十ヶ年の修行を棒に振り百夜の祈願のその最後、「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と切り墮とされ、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、親鸞一人がためなりけり」と躍り上がられたのだ。聞いても知っても自分の計らいは皆駄目なのだ。学問も理屈も往生の助太刀には総てが間に合わないのだ。八方塞りの此の境地、三千世界の者は皆助かって法龍一人は絶対に助からないのだ。

机の上には小さいお仏壇と右にはお聖教、左には両親の写真、「お母さん!! 私を僧侶に

しよう布哇まで行って下さったが、御期待に添う事が出来ず、今猛火に包まれ、渦巻く

怒涛に吞まれつつあるのでございます。私を僧侶にして下さりさえしなければ、こんな苦悩

は有るまいものを」と恨む心が五逆の親玉であり、自分の機執のとれないのを棚に上げて、

こんな難しい法が何処に有るだろう、「他力」も「唯」も皆嘘だ!! 私一人は八千遍の

御苦勞に洩れてるのだ、とは謗法の親玉なのだ。これだけ火の付くように苦しくても、心の

底は何ともない、無間のどん底から噴き上げる毒焰はお聖教の盃の水ぐらいでは消えないの

だ、と平気でいる奴が闡提の親玉なのだ。

これが難化の三機かい、これが難治の三病かいと、狂っている時、「涅槃經」の無常の

虎の絵を思い出した。無常の虎に追い立てられた旅人が断崖絶壁まで追いつめられ松

の木から命の綱の葛藤にぶら下がり、下を見れば三毒の煩惱の龍は噛み付こうとしてい

る。 白と黒の昼夜の鼠は、葛藤の根本をかじりつつあるのに、欲の荷物を負うた旅人は、

この世の欲望の蜂蜜の落ちて来るのを嘗めて喜んでいるではないか。 今切れたらどうなる

のだと、 周章てれば周章てるほど振りは大きくなるばかりだ。 嗚呼どうしよう、どう

成ったらよいのだ、どうしたら助かるのだ。 聞いたも 知ったも覚えたも、智慧も才覚も

学問も、有難いも嬉しいも慎みも、信じたも 戴いたも 得心したも 思い振りだから皆間

に合わないのだ。 業に引かれて 元の古巢に唸り込むより他に道がないのだと 往生の望

みが絶えた時、言葉離れて 黒煙の中に投げ込まれた時が先か、 十劫このかた立ち続けた

親が 其機見抜いて成就した誓願不思議で救うぞと、 声なき声に動かされた時が先か。 躍

り上がったぞ、飛び上がったぞ。 五劫思惟の本願は法龍一人の為であった。 十方世界

我物なり、私が参らで誰が参るか。

祖師聖人様 あなた様は七百年の古にこの威大な境地を諦得されたのでございます

か。それならばこそ肉食妻帯をした悪魔の坊主よと批難されながらも、師匠に背いた横着坊主よと攻撃されながらも、身は流罪に逢いながら、弁円の剣の下を潜り抜けながらも、「これなお師教の恩致なり」と微笑つつ、死に行く人々の批評位で後すぎりが出来るかい、死なぬ仏に逢うたが仕合せではないかとは、何と偉大な信念でございましょう。七百年の末に生れた法龍も、八方攻撃を蒙りながらも、唯々仏恩の深重なることを念じつつこの信念を叫ばずにはおられないのです。

浄土真宗の現代の布教を眺めた時、体失往生、身命終の死後の往生のみを語る善慧房の味方となり、祖師聖人の平生業成の鮮やかさの、不体失往生、心命終の唯信独達の法門は、猛煙に包まれて、今や真意を消失しようとしているではないか。他力他力と言いつながら無力となつてはいないか。その儘その儘と語りながらわがままに成つてはいないか。唯じや唯じやと教えつつ 唯に成る事を忘れてはいないか。不思議不思議と説きつ

つふ抜けに成つてはいないか。

今や 浄土真宗は衰滅の一路を辿りつつあることに気が付かないのか。 法龍は浄土

真宗を批難する者でもなければ 本願寺の宗政を攻撃するものでもない。 唯愛山護法の

念に燃え、 嚴護法城の実を挙げようと身命を賭している者である。 政策や技巧や社会

事業の真似では赤字の補填は出来ないのだ。 唯御聖教の殻を脱して生きた信仰のみに

宗教を復興せしむる力が有るのだ。

今や青年男女が浄土真宗から離脱しつつある事に気が付かないのか。 その原因が何処に

在るか御承知か。 第一には僧侶に在るのだ。 徒に葬式読経に追い廻され、たまたま

布教をすれば 現実の生活とかけ離れ、遠い死後の夢物語を、さも見て来たように浪花節で

唸り上げ、 一流の布教師と自惚れて、 法衣を脱げば酒池肉林、俗人も顔をそむける

脱線振りで、姿に掛けての説法は微塵もないではないか。 それで青年男女が随喜讃仰する

とおも
と思つてゐるのか。

第二にはいわゆる同行方が、悪人正機を傘に着て、直して来いとは仰有らないと、
放逸無慚の生活をしているために、何年間いても効能の顯れない宗教なら聞く必要がない
と、青年男女が離反してゐるのだぞ。

今や極悪最下の法龍は、世界無比の宗教たる真俗二諦、現当二世の幸福を得る此の深法に
生かされた嬉しきには、毀誉褒貶を外にして、たとい身は八つ裂きにされようとも、十方
世界の群類に、この大法を宣布せずにはゐられないのであります。鈍根無智の法龍が、十方
法界に比類なき絶対他力、唯信独達の妙法に生かされた尊きには、たとい身は極微に碎か
れようとも、学階、度牒は剥奪されようとも、苦悩を抱ける同行の心弦にこの深法を叫び届
けずにゐられないのであります。